

3・農業集落における

戸数変動について

長谷川宏二（農業技術研究所）

(1) 山村地域を中心に、過疎化の進行がもっとも目立った昭和三十五と四十三年の間に、農業集落の戸数がどのような変動を示したかについて、高知県を対象事例として統計的考察を試みた結果を報告する。

(2) 戸数減少に伴う「地域論的過疎」といわれる事態が、個々の集落レベルで生じているという現実の山村地域の動きに即して、社会的生活単位としての集落が、いかなる戸数規模を限界として成立するのか、そのことの確認のための予備的考察として進めた。

(3) この問題を量的に把握するためには、特定年次における総計乃至平均を比較することは無意味で、個々の集落の戸数規模の動きをトレースしなければならぬ。そのための原資料として、ここでは高知県過疎対策本部が農業集落調査をもとに、その後の変化を整

理してまとめた「高知県集落台帳」によることとした。この資料には、県内二、四〇〇余の集落それぞれについて、昭和三十五、四十三の三年次の世帯および人口数、増減率が記載されており、以上の統計処理に適している。

(4) 山村地域の動向をより明確にするために、旧市町村を単位とした農林省統計情報部の経済地帯区分に従って山村、農山村、平地村に区分して集計・加工作業を進めた。その結果の概要を列記すれば、次の通りである。最終的な集計集落数は、山村八九一、農山村九五〇、平地農村五六一、合計二、四〇二である。

① 農業集落の戸数規模階層別の世帯、人口の動きを、まず、昭和三十五、四十三年兩年の単純平均で比較した結果、集落戸数規模の上での大・小両極への分化傾向がみられた。経済地帯別では、山村集落の下向（戸数・人口減）と平地農村集落の上向という対照的な動きを示していた。

② 次に、戸数変動と人口変動の関連を、個々の集落の戸数規模階層間の移動状況に従って、A（下位階層へ移行）、B（同一階層に止ったもの）、C（上位階層へ移行）の3グループに区分し、それぞれの人口の動きをみた。その結果、人口減少のあった集落の占める比率は、A↓B↓Cへと比例的に低下していた。人口増加のあった集落の占める比率はこれとちょうど逆の傾向を示す。

③ さらにこのA、B、C3グループの中に戸数規模階層を入れて世帯、人口の増減率をみると、同一グループの中でも、戸数規模の大小による相違が明らかにみられ、下位階層ほど世帯、人口の減少率

が高い。また、戸数規模の上では上位階層へ移行したグループでも、山村の場合、下位階層において人口の減少が認められた。

④ 昭和三十五と四十三年の八年間の戸数規模階層間の移動状況を、経済地帯別、戸数規模階層別にみた結果は、次のとおりであった。

昭和三十五年を基準年次としたその後の階層間移動（上向・下向）は、山村地域において、すべての戸数規模階層を通じて上向集落が一〇%以下に止まるのに対して、下向集落がそれを上回っていない。農山村では、各階層とも上向集落の二〇%台に対して、下向集落が一〇%以下に止まる。農山村では下向、上向集落が各階層ともほぼ同じ比率で一〇と二〇%を示す。

これを昭和四十三年でみると、昭和四十三年の同一階層に属する集落のうち、山村では、Ⅶ（七一と一〇〇戸）階層を境にして、それ以上層で上向集落の占める比率が高くなる。Ⅶ以下層では下層へゆく程下向してきた集落の占める比率が高い。農山村も大体山村と同じ傾向を示すが、その比率は、山村に比して遙かに低い。平地農村では、下向してきた集落数が上向してきたものを上回るのはⅠ（一〇戸以下）階層とⅡ（一一と二〇戸）階層だけである。

⑤ 昭和三十五年を基準年次とした場合、まず山村集落において、その後の移動率が高いのは、Ⅴ（五一と七〇戸）及びⅦ（七一と一〇〇戸）の二階層であり、その大部分が下向集落である。Ⅲ（二二と三〇戸）、Ⅳ（三一と五〇戸）階層ではこの移動率が低まりⅡ（一一と二〇戸）層で最低となる。

逆に昭和四十三年を基準年次とした場合、下位階層ほど下向して

付表 集落戸数階層別移動状況

区 分		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計 (昭35)	移動集落率(%)	
											上向し た集落	下向し た集落
平地 農村	I	3	1	0	0	0	0	0	0	4	25.0	-
	II	5	31	8	0	0	0	0	0	44	18.2	11.4
	III	0	6	57	27	0	0	0	0	90	30.0	6.7
	IV	0	1	4	117	37	1	0	0	160	23.7	3.1
	V	0	0	0	13	87	23	4	0	127	21.2	10.2
	VI	0	0	1	1	2	39	18	1	62	30.6	6.4
	VII	0	0	0	0	0	1	29	9	39	23.1	2.6
	VIII	0	0	0	0	0	0	1	34	35	-	2.9
	計(昭43)	8	39	70	158	126	64	52	44	561	23.0	6.2
移集 動率	上向してきたもの	-	2.6	11.4	17.1	29.4	37.5	42.3	22.7	-	-	-
	下向してきたもの	62.5	18.0	7.1	8.9	1.6	1.6	1.9	-	-	-	-
農 山 村	I	20	3	0	0	0	0	0	0	23	13.0	-
	II	12	73	10	1	0	0	0	0	96	11.4	12.5
	III	1	26	104	26	1	0	0	0	158	17.1	21.1
	IV	0	5	31	222	25	3	1	0	287	10.0	12.5
	V	0	0	0	31	93	16	2	0	142	12.7	21.8
	VI	0	0	0	3	26	76	14	1	120	12.5	24.2
	VII	0	0	0	0	2	4	39	9	54	16.7	11.1
	VIII	0	0	0	0	0	0	2	68	70	-	2.9
	計(昭43)	33	107	145	283	147	99	58	78	950	11.8	15.0
移集 動率	上向してきたもの	-	2.8	6.9	9.5	17.7	19.2	29.3	12.8	-	-	-
	下向してきたもの	39.4	29.0	21.4	12.0	19.1	4.0	3.4	-	-	-	-
山 村	I	28	3	0	0	0	0	0	0	31	9.7	-
	II	28	114	9	0	1	0	0	0	152	6.6	18.4
	III	3	5.9	12.2	11	1	0	0	0	196	6.1	31.6
	IV	3	6	6.1	16.6	11	1	0	0	248	4.8	28.2
	V	1	1	2	5.3	7.3	6	1	0	137	5.1	41.6
	VI	0	0	1	7	20	3.2	5	0	65	7.7	43.1
	VII	0	0	0	0	5	7	2.2	4	38	10.5	31.6
	VIII	0	0	0	1	0	0	6	1.7	24	-	29.2
	計(昭43)	63	183	195	238	111	46	34	21	891	6.0	29.6
移集 動率	上向してきたもの	-	1.6	4.6	4.6	11.7	15.2	17.7	23.5	-	-	-
	下向してきたもの	55.5	36.1	32.7	25.6	22.5	15.2	17.7	-	-	-	-

きた集落の占める比率が高くなり、Ⅰ（一〇戸以下）階層では全体の半数以上を占めるまでになる。この場合、Ⅱ（一一戸～二〇戸）階層とⅠ階層との間に一つの「段落」がうかがえるのであり、先の移動率の低さも考えれば、このⅡ階層が、山村における戸数規模の最低線を画しているように思える。

⑥平地農村の場合は、昭和三十五年を基準とした場合、その後上向したものが全階層を通じて下向したものを上回っているが、Ⅱ、Ⅲの二階層に移動の「段落」がみられ、その前後の階層での移動が大きい。

また昭和四十三年基準では、Ⅳ階層を境に上向してきたものの比率増加が目立ち、ここでもⅣ階層が一つの段落をなすと同時に、Ⅱ階層の移動率の低さからみて、この二つの階層が平地農村における戸数規模階層間の集落移動の二つの「段落」を形成していることがわかる。

(5) 以上の結果から、戸数規模階層間を通じての集落の移動は、上向、下向ともにⅡ、Ⅳ階層を「段落」として進むことが理解された。つまりこの二階層が、社会的生活単位としての集落の戸数規模を、それぞれに示すのではないかと考えられる。